

$\textcircled{+} 1027$ の $\textcircled{+}$
 $\textcircled{+} 1303 - \frac{4}{15}$
 $\textcircled{+} 1309 - \frac{1}{2}$
 1309 1027 1303 1309 の...

漢代の五門五闕について
 皇門・庫門・雉門・応門・虎門（路門）
 朱雀闕・南宮闕・蒼竜闕・北闕・白虎闕
 水経注に穀水条を見てみよう。（以下第247、248回参照）
 漢官典職に
 偃師は洛陽（陽）
 を去ること八東に四十五里（約二十里）から
 朱雀闕を望むと、その上は杳然然然（杳然）なること
 として天と連らなっている。峻極を明らかにする
 ものた、とある。洛陽故宮名には、朱
 雀闕、白虎闕、蒼竜闕、北闕、南宮闕がある
 東観漢記には、更始（二三、二四）に洛
 陽を発するとき、李松が車を奉引して馬が奔
 走して北闕の鉄柱門にふれ、三頭の馬がみな
 死んだ、とある。はすなわちこの闕で
 白虎通に、門に必ず闕があるのは何故か
 というに、闕は門を飾り尊卑を区別するも
 のだからである、という。今（北魏代）閼闔
 門（南宮正門）外に巨大な闕を（門を）はさ
 み建てて、天の星宿に応ずるようになっている。

小林 471P
易える

洛陽カラニ 132P
水経注 314P

345P

1.307P-1/2

1306P

礼の「ご」とくではないが、なお「水」を象して魏
し、上に復思を加えてもつて観を易える

とある。「古」中国の都市とその周辺に服部克

尚、曰「白虎通」(「白虎通義」の略称)は、

後漢章帝の時(七九)に学者や高官を曰「白

虎觀」(「白虎闕」)に招集し「經書解詁」の異同

を論定させ、それを班固が整理編集

したものである、という。(「洛陽伽藍記」水経

注「中国古典」四平八社、三一四頁、一三二頁注

二五。東洋史辞典「創元新社」章帝「参考」

後漢時代の雒陽には、朱雀闕があ

り、そのほか「白虎闕」蒼竜闕、北闕、南

宮闕があつたのであろう。

そして、これらの五つの闕(門)の左右にたて

た物見台のうちでも、朱雀闕が特に拔んで

て高かつたことが推察される。

では「こ」五つの闕は、雒陽宮城内

のどの門に、どのように配されていたのか

ろうか。

*

1308-3/3 45P
配されてたのであろう。

1305P 1/2 95P

洛陽カラニ 314P 易える

→ H3. 9. 26 (木) ④
H10. 4. 11 (土)

雨観 ④ 1289° 1/2
双関 ④ 1316

1.307° - 3/2

深尺 = 23.04 cm
100R = 2300 cm
= 23 m
④ 1354

9口の帝都 56° 10分

洛陽から記 314°
関には門観である

ちよっかん
直感 ④ 1462°

先ず、直感的に、

へ後漢の南宮の正門外左右には、
南宮正門の門観・物見台が聳え立っている
たのであろう ✓

と思われろ。

このような関が南宮正門に一组、
それか北方の北宮正門にも一组聳えており、こ

れう南宮の関は、
て、相望んでいるかのようである。たのかも知

れない。
三國志

● 日元河南志に卷二の「後漢城關宮殿古蹟」

における「北宮」の条の最後に、
古詩云。西宮遙相望。雙關百餘尺

とある。「中国の帝都」村田治郎、綜芸舎

五六頁参照

13.5m 南宮と北宮は遥かに相望む。南北西宮そ
れぞれの門脇には双関が聳え立っていて、その

高さは百餘尺もあった
という意味なのではなかろうか。

＊

そりゅう、りゅう 小林
蒼龍 841

① 1307-2/2 同天 ほうかん元
② 1310 包含 2011
③ 1304-5/6 虎門 (2018/22) 包含 2025

1.308 1/3 ④ 1311 平門 ⑤ 1155
⑥ 1306 漢代

紀F194 新羅・任那・南門
紀F191 2 大門

余の(高)さで、競(あ)うよう(に)対峙(たいし)して(いた)た
とある(よ)り、(南)宮(なんきゅう)遥(はるか)に相(あ)いひ望(ぞ)んで(いた)。(既述)
古(いにしへ)詩(うた)云(い)ふ。兩(りやう)宮(きゅう)遥(はるか)相(あ)いひ望(ぞ)んで(いた)。(既述)
兩(りやう)宮(きゅう)の雙(そう)闕(けつ)は百(ひゃく)餘(よ)尺(せき)に
かあ(つ)た(よう)に思(おも)ひ小(こ)る。
南北(なんぼく)兩(りやう)宮(きゅう)は、遥(はるか)に相(あ)いひ望(ぞ)んで(いた)。(既述)
は、(白)虎(はく)闕(けつ)を内(ない)奥(おく)に包(ほう)有(ゆう)する。日(ひ)北(はく)宮(きゅう)に
有(ゆう)する。日(ひ)南(なん)宮(きゅう)闕(けつ)が(あ)り、一(いつ)方(ほう)、北(はく)宮(きゅう)に
また、南(なん)宮(きゅう)に(は)蒼(そう)龍(りゅう)闕(けつ)を内(ない)奥(おく)に包(ほう)
天(てん)と連(つ)なる(ばかり)に高(たか)々と聳(そ)え立(た)つて(いた)た
と(で)あ(ら)う。
外(がい)側(がわ)・西(せい)脇(わき)に(は)、日(ひ)朱(しゅ)雀(さく)闕(けつ)が、然(しか)んと(して)
後(ご)漢(かん)時(じ)代(だい)に雒(らく)陽(やう)宮(きゅう)城(じやう)の正(せい)門(もん)で(あ)つた平(へい)門(もん)の
る。(以下)第(だい)四(し)回(かい)後(ご)漢(かん)時(じ)代(だい)の門(もん)お(よ)び闕(けつ)想(さう)像(ざう)図(ず)参(さん)照(しやう)
關(かん)に(つ)いて、次(つぎ)の(よう)な配(はい)置(ち)が考(こう)えら(れ)小(こ)
さ(ら)長(ちやう)平(へい)城(じやう)宮(きゅう)の門(もん)名(な)な(ど)を参(さん)考(こう)に(して)考(こう)察(さつ)す
と、(後)漢(かん)代(だい)の雒(らく)陽(やう)宮(きゅう)城(じやう)内(ない)の日(ひ)門(もん)に(よ)び
關(かん)に(つ)いて、次(つぎ)の(よう)な配(はい)置(ち)が考(こう)えら(れ)小(こ)
お(よ)び推(お)し古(いにしへ)紀(き)十(じゅう)六(ろく)年(ねん)八(はち)月(げつ)条(じょう)、同(どう)十(じゅう)八(はち)年(ねん)十(じゅう)月(げつ)条(じょう)
中国(ちゆうごく)の書(しよ)物(ぶつ)に(しる)さ(れ)小(こ)て(い)る記(き)事(じ)
①

前(ぜん)頁(げつ) 175 雙(そう)闕(けつ)

28宿 1694^P 白虎 (西の神) 1893^P 671^P 421^P 421^P
蒼龍 (東の神) 1297^P 841^P 1,308^{P-2} 3

「龍」 小持 1119^P 125^P 元 1708^P 蒼 (青) 1183^P
1290^P (龍驤虎視) 1024^P 2598^P 小持 1119^P

1307-2/2 1307-2/18

に違いない。
ともあれ、
「南宮に蒼竜（青い竜）、北宮に白虎」
が配されていたのであろう。
龍驤虎視という言葉がある。
龍が首を高く上げ、虎が隙をぬらう。
という意味である。（漢和辞典）
中国の往古の人々は、
蒼竜と白虎とが、宮城上空で鋭く睨み合
い、互いに譲らず隙をうかがっている壮絶な様子
を思い描いたのだろうか。
中国では、蒼竜（東）、白虎（西）、朱雀
（南）、玄武（北）の四宮に分け、更に各宮
を七分して、総計二十八宿に区分した。
蒼竜（青色の竜）は、二十八宿中の東
方七宿をいい、天上の東方を守る神である。
白虎は、二十八宿中の西方七宿をいい、
天上の西方を守る神である。
大極殿の西南の
白虎楼に相對する、
二十八宿・蒼竜・白虎
漢

日本史 113 天門は朝堂院の西門
元 1342 大内亮

ニウ 小林
阜 676^p

200 1304^p 1308^p - 3/3

1893^p

和辞典 小林信明、小学館へ蒼龍・白虎

照

なるほど、^{1297^p} 蒼竜關は南、^{1893^p} 白虎關は

北に配されていたらうと記せば、奇妙な感もある。

かし、

へ蒼竜關は南宮内にあって、東方を守る。

白虎關は北宮内にあって、西方を守る。

と考えらわったのかも知れない。

そして、後漢の雒陽宮城内の門は、南

から北へ順に、

(1) 雒陽宮城の正門である日皐門(中門)へ平門

(2) 南宮の正門である日庫門(中門)

(3) 南宮の内側から二番目の門である日雉門

(4) 南宮内奥の門

また、

(5) 北宮の正門である日心門(中門)

(6) 北宮の内側から二番目の門である日虎門

(7) 北宮内奥の門

路門(畢門)

というように、一直線上に設けられていたの

であらう、と想像される。

曹 小林 1045 陵雲 高 56' 三 国 志 174 昭陽殿が北 太極殿が南 内から2番目 「雉門」 小林 1036
 小林 1028 三 国 志 174 昭陽殿が北 太極殿が南 内から2番目 「雉門」 小林 1036
 1314 綱 = 殿 262 1308 末 39 1,309 1/2 1306 漢代 1310 雉門 1382 1/2

なるおへ 雉門 天子の城の南門。五門のうち二番目である。漢和辞典 小林
 信明、小学館へ雉門へ参照
 とはいえ、後漢末に、こ小らの門や闕な
 と 雉門は失ってしまったのだった。
 曹魏代の門・闕について
 一かしの次の曹魏の時代（特に明帝の頃）
 各種の殿舎・門・闕などが続々と建てられ
 再建された。以下、第四回曹魏時代の門・闕
 ① 三 国 志 魏書 高堂隆伝 に、
 帝（明帝）はいよいよ宮殿を盛大に増築
 し、楼閣には彫刻の装飾をほどこし、太
 極殿の北に昭陽殿を建て、黄龍や鳳凰や大
 な獣を鋳造し、金墉城、陵雲台、陵雲闕を装
 飾した。南宮の正殿（紫宸殿に相当する殿舎）
 とある。ここは、
 陵雲闕は、どこにあったのか定か
 でないが、北宮正門の闕（漢代の「北闕」）
 のことであろう、と考えてみたい。
 なあ、曹魏は天・大空・空の雲・夜など

版 9~10^p
1,309^p-²/₂

ニ
八

を意味し、曰陵霄は「高く飛ぶ」と

いうで、「漢和辞典」小林信明、小学館

〈霄〉へ〈陵霄〉参照

② さて、同じ曰三国志は魏書へ高堂隆伝

に、

「今、宮殿台觀(物見台)はせいたくを極め

彫刻は巧妙を極め、―――――壯麗さは阿房

(秦の始皇帝の宮殿)と紛うほどである

と記されてゐる

察するとところ、

へ後漢末に焼土と化した洛陽の地に、魏の

明帝のころ、数多くの殿が再興された

ものと思われ

建造物か華やかに新築

小林 1028^p

()

(市) 1281 ^P ちとろ 1430
 (ニ) 馬道天子*貴人の通路 (市) 1188 ^P 1303
 -447

同文^P
 ① 1304- $\frac{5}{5}$ -1行
 1320^P- $\frac{1}{2}$

「安藤門を新築した」とは
言われていない。

コクヨ ケー20 20×20

591

① 1304 岁
肖陈-12.

⑤ $1304^0 - \frac{5}{5}$
157 ~

大カン7 681
ミユウト7

① $1304^h - 5/5$ 259
② $1303^h - 3/4$ の図 147 と 572

記されている
1309-2/29

ないおう
内奥
HL

1.310^p-2/2

司馬門 原文(赤)(一)-92^p, 394^p(金門) 天子の専用道路 三〇走Ⅱ-38^p
三〇走Ⅱ-38^p 37^p 41^p 外部城内の「御道」128^p 子建 = 曹植
水経注 315 東洋史 417^p

この「馳道往来の禁」は、もっぱら兩漢の
ときと同じであった。それなのに曹子建(曹植)
は車に乗って天子の専用道路を通り、司馬
門を開いて外に出て、金門らまで行った。
太祖(曹操)はこのことにたいそう腹をたて
て、そして、太祖の曹植への寵愛は、日
に日におとろえていった。
という。「三国志」魏書第十九陳思王植伝。
「水経注」八穀水「条参照」(三国志)汲冢書院三九四頁(金門)
とすれば、司馬門および金門は、
洛陽城の中軸線をなす大道「銅駝街」の
どの位置にあったのだろうか。
ここに、
「曹植は、天子の専用道路を通り、司馬門
を開いて外に出て、金門まで行った」
とあるのだから、
内奥北寄りにあり、金門ら加その南にあつ
たことが分る。
ところで、「水経注」八穀水「条に、こう
記載されている。

1.311 P ①1187-2/4 天つぎ 改行 ①1188-2/3 ①1314-1/3 明帝の時に... ①1318-1/3 水経注 315 P ①1313-2/3 49

渠水は、北魏時代の銅駝街から東に
 向かい、曹魏時代の司馬門の南をすぎ、
 魏の明帝が始めて關を築いたとき、
 崩れて数百人の者を圧殺したので、
 た築かなかった。故に關がないのである。
 恐らく、魏の明帝が曹魏時代の洛陽宮城の中
 軸線をなす大道（銅駝街）の門である司馬
 門に關を築いた直後、その關が崩れてしまった
 という意味なのだろう。
 魏時代の銅駝街や平昌門があったのではなかつたか。
 魏時代の宮城南面の門に、司馬門に關を築いた
 というのだから、司馬門はよほど重要な
 門だったのであらう。
 ①もつとも、これだけの資料では、司馬門
 および金門がどこにあったのか明確には
 分らない。
 ①へ南宮の正門、庫門と、宮城の正門、
 門とを平昌門と銅駝街の途中に、司馬
 門とを金門とが配されて、
 とも解し得よう。

千代子 5組の石段
羅城門

1, 3, 2^p

④ 1315

やけあと 云
焼跡 2217'

④ 1319

→ A 1155

6/10

奇異な印象を受ける。

あるいは、漢代の南宮の正明日庫門の焼

跡の地に再建された曹魏代の
門が、
司馬門

と
呼ばれ、
漢代の
平門は
曹魏代
に平昌

明と改称され
 ！また、漢代の京城の正明

端門
の焼跡の地に
再興された曹魏代の門

か
コ
金門^{きんもん}
と
称^{しょう}され
た
の
で^だあ
ろう
か。

● 寸で、に、第十四章、第○表、各陽内城城

門名一覽表に示したように――洛陽の

宣城門の名称は、
後漢代と曹魏代とで異なる

その多い

十二の宮城門のうち、十が改修され、残

る
二
つ
(開陽門と廣陽門)
の
み
か
そ
の
ま
ま
謎

縁さ小たのたった

こ
水
と
同
様
に
、
宮
成
明
乃
外
に
配
文
水
を
諸
明

金でとまりえな
金でとまりえな

[illegible]

と、いふよりも

きゅういのみなみせいもん
へいしゅう
きだんいろう

八宮城正殿を平昌殿に
基壇上に建てられてい

魚の通作は不可能である

④ 1303^P - 4/4 [Z]
④ 1380^P 283

と想像される。第○図は洛陽宮城門想像図の基壇を
 ②そこで、
 ●日司馬門は、三つに仕切られた大道日銅
 駝街の北端にあたる日南宮の正門に設け
 られた日三つの門の内、日中央の門の
 名であり、
 ●日金門は、洛陽宮城南面の正門あり日平
 昌門に設けられた日三つの門の内、日中
 央の門の名だったのであろう、
 と仮定してみた。
 ■すなわち、
 ①南宮の正門と宮城の正門とを結ぶ日銅駝街
 は三つに仕切られていて、中央の御道が天子
 の専用通路であり、この馳道の往來すること
 は皇子といえども許されていなかった。
 ②ところか曹植は南宮の正門に設けられ
 た三つの門のうちの中央の門日司馬門を開
 いて外に出て、宮城の正門（平昌門）に設け
 られた三つの門のうちの中央の門日金門にま
 で行った、
 ということなのかも知れない。

春秋

大要はたす
小要はくする

1311 3斤

字下げ

1210 4エツク

1209 天つき

天つき
改行

1313 2/3

1289 1/2 雨敵 双闘

12 12 9斤

それ

魏

と

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

魏

それは、

魏の明帝が始めて（司馬門に）

「魏が」崩れて数百人の者を圧殺した

「魏が崩れた時、その近傍に数百人以上の大勢の人々がい

た。魏の明帝は、景初三年（二三九）正月一日

に、三十六歳の若さで亡くなった。（第十五

章人明帝崩・曹芳即位）の項において既述

と、いう一つの出来事の脇には「！も！か！た！ら

緊急な関係性があるのかも知れない。

（後国の女王卑彌呼が朝貢した二二九九年の年頭

定かでないが、あえて想像されるところを

示してみよう。

（景初二年（二三八）末頃のある日、司馬門

の近くで、晴れやかな祭典がとり行なわれて

いた。

（司馬門を飾る為に設けられた）双闘（物見

台）の上にも、大勢の朝臣達が登って祝賀気分を

盛り上げていたに相違ない。走行中の

（司馬門の前で馬車を止めた明帝は、拍手喝采して郷音動め

の方面寄りに偏って乗っていたとだろう。

（司馬門の前で馬車を止めた明帝は、拍手喝采して郷音動め

1380P

416.8.12(木) ⑤
417.9.23(金) ⑥
418.12.2(土)

片一方 22頁 4行 字中の帯からは秘密に属する ①211
1.313P-3/3

1311P

改行

(5) ところかそんな時、南宮の正門司馬門
 の両親へ双腕のうちの片方が、突然
 水で明帝めかけて倒れ掛かっていた。
 (6) 天から人が降ってきた。(7) 巨大な観音が轟音をたてて砕け壊れた。
 (8) 数百人もの死傷者が出た。
 (9) この惨状のなか、辛うじて救出されたとはい
 え重態に陥った明帝は、翌年(二三九)
 の正月一日に死去された。
 といった経過があつたのだらうと思われ。
 推測の域をでるものではない。
 春秋のたてまえでは、
 「国内の事件」について大きな悪事、
 事・悪い事件は隠して記さず、小さな悪事
 は記すものである。と、(I) 世界古典文学全集、
 筑摩書房(第三刷)一五四頁参照。
 * 明帝死去の原因は、隠されたものだろう。
 ④ なお、司馬門の左右に各一つづつの壁が有
 ったとすれば、
 へ二ヶ同時に倒壊した。
 とは考えにくい。
 ・ 片方のみが崩れ落ち、もう一方はそのまま残
 されていったことだろう。

大きな石

水経注 314° (田) 閼闔門
水経注 314° 閼闔門
閼闔門 1306° 末に同文
314° 383°

1311° 末
東朝軒 373°

1,314° - 1/2

小野山 176° 上
朝堂院の正門の
二様が残りた

板20斤

すなわち、
なるほど詳細について分らないが、この
物語では、魏の景初三年（二三九）当時、
へ南宮の正門曰司馬門に、
のであらう。双闕のうちの片一方
と考えてみたい。

（*）
とはいえ、南宮正門に、
では、
そこで、曹魏時代（二〇二～二六五）の次の
（二六五～三一六）に、南宮正門の、
のではなからうか、
北魏時代の南宮正門の、
そこで、北魏時代に洛陽城が復興された際、
南宮正門、
てられたのだろう。
水経注に、
南宮の正門、
み建てて、天の星宿に、
と述べている。（第十八章へ漢代の五門

H30(2018)3.12(月)~ (3回)
 H30(2018)12.25(火)~12.26 (3回)
 和元(2019)5.26(日)~5.27(日) 新刊 92P 第11回

「小町」56頁

1.314^{P-2/2}

741W
 ①1154^P

①1159^{P-3/3}

①1306^末

F 5/27
 5/26

*

五願について✓の項において既述
 なお、北魏時代の洛陽城を発掘した結果か
 らいえば、
 へ南宮の位置が、かなり北の方へ移動した
 らしい✓
 という。第十四章へ「宮城門名」
 形態の変遷の項末尾に「宮城門名」
 も「か」たら、宮城の正門は宣陽門を通
 った宮城内へ入った者達の目に
 なたの王宮が豪華に見えるように特に配慮
 して、
 大なる門を建てた
 (巻頭の第11回参照)
 (南宮の南正門)外に巨

貧相に見えるように

大電、永年

建康
云1408
南北方向
11月24

西国・新西国礼新めす14^p
拱門云578^p

治陽から云に4に計算(20大)

418.12.3(4)地
善知鳥頭 云202^p 外4便の狼師カウウを殺佐。
善知安石是義臣
善知鳥頭云能の一つ
善知鳥頭云(臣下の者)が
やまかたに殺る源やまかたか?

か
高
目
7
小村
222^p 大嘗祭
以前、なる

たる社殿は、この世では嘗て聞かぬものであ
つた。
東と西の二門もこ水と同様であつた。た
だ南門と異なるのは、楼閣が二層造りである
ことだけであつた。
北の門だけは、上に楼閣を設けず、鳥頭門
(門の左右の両柱が向かいあつて高くそびえ
二つの扉の上部分が格子作りになつたものうし
ひに似ていた)
と云う。
トル
非常に興味深いことに、
「永寧寺の南門は、三層の楼門で
三本の階段通路を備えており、高さは地
上二十丈。その作りは、今の(北魏時代の)
山門(宮城の南正面の門という)に似
ていた」
と述べられていて、注目される。

塔
云
1091^p

大
林
222^p

東大寺南大門の獅子 金剛力士は東向きだという H13.12.6 Tel 確認した。(青岸渡寺)
 5file 1315-3/5 方向については元立ない! (写真) 1,315^P-3/4
 (ニ) 改訂 実が見当たらない。なぐてもいい

絵はかき
 22は石段道でない。

と、いう(こ)とに興(きょう)趣(そ)を覚(おぼ)え(る)。(一)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 向(む)き(に)配(はい)置(ち)さ(れ)て(い)る(と)い(う)。(二)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 の金(こん)剛(ごう)力(りき)士(し)と(一)仕(し)切(きり)板(いた)を(は)き(ん)で(二)背(せ)中(ちゅう)合(あ)わ(せ)
 に(二)匹(ひき)の(大(おお)き(な)犬(いぬ)へ(獅(し)子(し)に(似(に)た(た)巨(きょ)獣(じゅう)か(内(うち)
 から(見(み)て(外(がい)向(む)き(に)安(あん)置(ち)さ(れ)て(い)る(と)い(う)。(三)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 代(だい)の(仏(ぶつ)師(し)の(運(うん)慶(けい)の(子(こ)作(さく)の(二(に)体(たい)の(金(こん)剛(ごう)力(りき)士(し)が(本(ほん)堂(どう)
 この(山(さん)門(もん)の(通(つう)路(ろ)の(左(ひだり)右(みぎ)に(は)は(湛(たん)慶(けい)(鎌(かま)倉(くら)時(とき)
 登(のぼ)り(の)山(さん)門(もん)へ(二(に)層(そう)の(楼(ろう)門(もん)か(登(のぼ)り(の)山(さん)門(もん)へ(二(に)層(そう)の(楼(ろう)門(もん)か
 分(ぶん)岐(ぎ)点(てん)か(ら)右(みぎ)側(がわ)の(石(いし)段(だん)を(少(すこ)し(の)ほ(ほ)る(と)朱(しゅ)
 左(ひだり)手(て)の(二(に)つ(の)鳥(とり)居(い)の(奥(おく)に(熊(くま)野(の)那(な)智(ち)大(だい)社(しゃ)か(あ)る(と)い(う)。
 る(と)い(う)。(四)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 い(ふ)登(のぼ)っ(た)と(こ)ろ(で)(石(いし)段(だん)道(みち)は(二(に)手(て)へ(や(や)や(や)分(わ)か(れ)
 て(み)た(い)。(五)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 へ(か)な(り)急(きゅう)な(石(いし)段(だん)道(みち)か(約(やく)五(ご)百(ひゃく)段(だん)つ(づ)く(と)い(う)。
 犬(いぬ)二(に)匹(ひき)か(配(はい)置(ち)さ(れ)て(い)る(と)い(う)。(六)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 智(ち)山(さん)青(せい)岸(がん)渡(だ)寺(じ)の(山(さん)門(もん)に(金(こん)剛(ごう)力(りき)士(し)像(ざう)二(に)体(たい)と
 犬(いぬ)二(に)匹(ひき)か(配(はい)置(ち)さ(れ)て(い)る(と)い(う)。(七)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 犬(いぬ)二(に)匹(ひき)か(配(はい)置(ち)さ(れ)て(い)る(と)い(う)。(八)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 犬(いぬ)二(に)匹(ひき)か(配(はい)置(ち)さ(れ)て(い)る(と)い(う)。(九)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)
 犬(いぬ)二(に)匹(ひき)か(配(はい)置(ち)さ(れ)て(い)る(と)い(う)。(十)西(さい)国(こく)・新(あらた)西(さい)

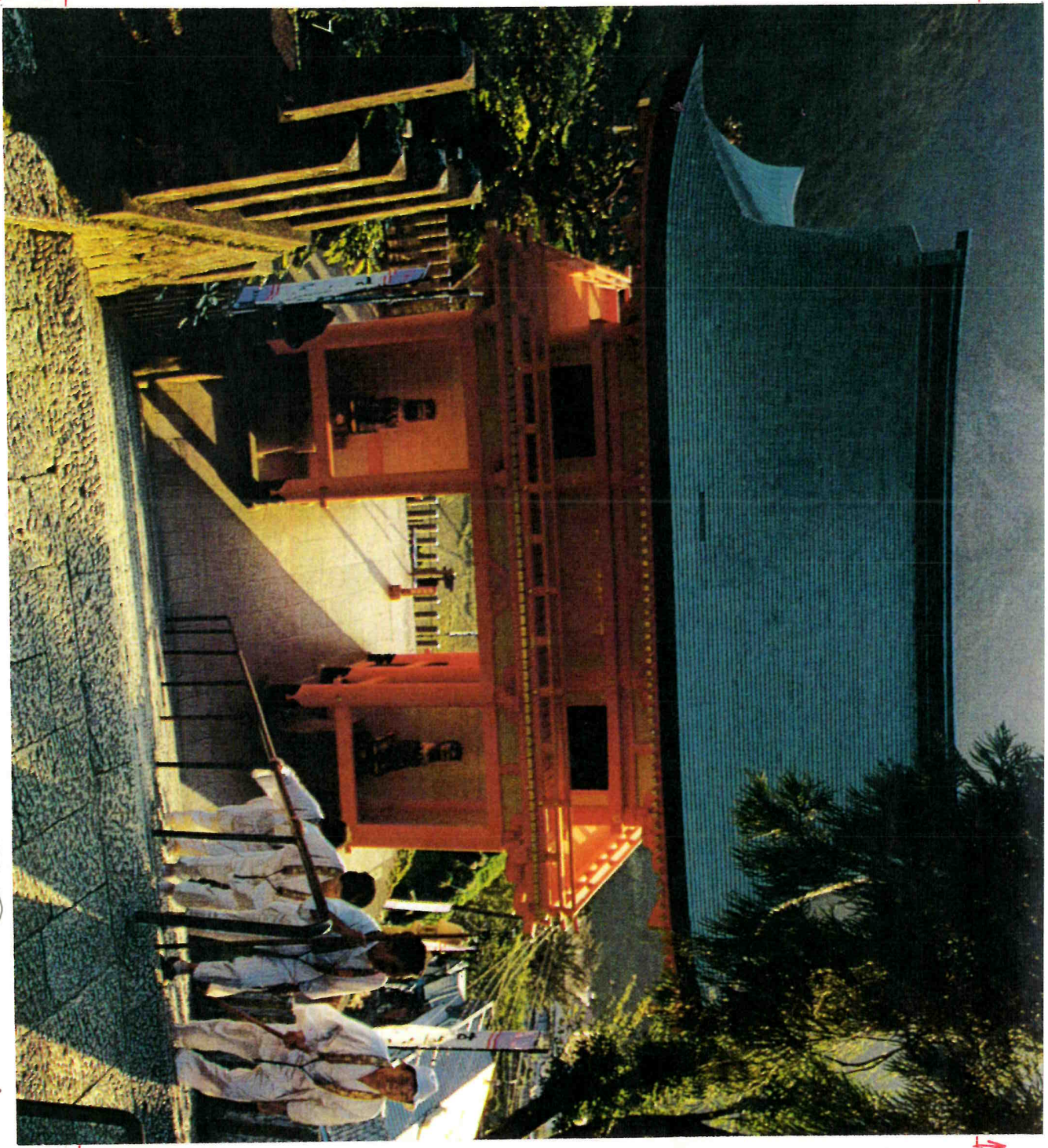
写真図版 217・218

小町 128^P下
 1行
 札所

大ざと
 ナスのよいち

・もう少し明るくしておいて下さい。
 ・右頁の上段に掲載。

603^p



1,315^p - 4/7

カ³ ↑

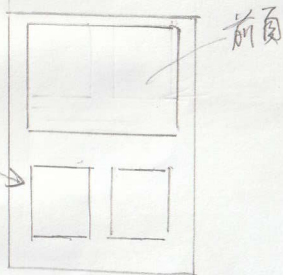
603^p

140^p 母真図版 217 青岸渡寺山門 内側を向っている狛犬
 130^p 那智山青岸渡寺山 那智山青岸渡寺 平成3年8月旧形行、1頁参照
 120^p 山門の左右に、金剛力士像(2体)から外向きに安置され、その背中
 合せて狛犬(2匹)から内方向きに配置されている。

1,3/5 5/7

・カラー

・右頁の下半分に、大きく
又葉を載せて下さい。



・できるだけ、明るく
しておいて下さい。



1429 写真版218 第1番札所 青岸渡寺山門の金剛力士像と狛犬

狛犬は、獅子に似た獣の像である。

平成13年(2001年)12月4日、著者撮影

東大寺の獅子、中国に兄弟



中国・南宋時代の石造獅子＝11月、中国・浙江省寧波で、山川均さん撮影

朝日H18(2006)12/11
朝日(9)

大和郡山市教委 職員が発見

(編集委員・小滝ちひろ)

奈良・東大寺の南大門にある石造りの「獅子」2体(重要文化財、高さ160×180・5寸)の「兄弟」像が、中国浙江省に現存することがわかった。現地調査した奈良県大和郡山市教委の山川均主任(中世考古学)が10日に同寺であったシンポジウムで発表した。中国の工人が12世紀末ごろにつくったとされる同寺の獅子のルーツが、800年ぶりに判明した。



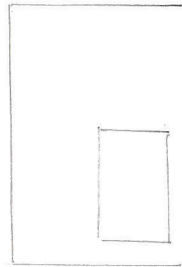
東大寺南大門の獅子＝奈良市の東大寺で

大きさ・石の種類 そっくり

東大寺の獅子は、平氏の南都焼き打ち(1180年)で焼けた南大門を復興した重源上人(1121～1206)の指揮でつくられた。運慶らが制作した仁王像の隣にあり、寺の古記録には「中国・南宋(1127～1279)の工人4人が1196(建久7)年に制作したが、日本の石ではつくりにくいので中国の石を輸入した」とある。2体のうち東側の像は躍動感ある作風から中国的と言われてきたが、これまで中国に類例が見あたらなかった。山川さんは11月下旬、浙江省の寧波を調査。古い石刻を陳列する公園で、南大門のものとほぼ同じ大きさで石の種類も似た姿の獅子を見つけた。大きく口を開けてほえる表情もそっくりだという。同時期にあたる南宋時代の上級官僚の墓の前に武人像などとともに並んでいたものを移築したという。山川さんは「大陸に渡った経験のある重源が、こうした像を見て東大寺にも安置したいと考えたのでは。東大寺と中国で科学的分析を試みる必要がある」と話している。

・カラー

・左ページの右下に、大きく載せて下か。



青岸渡寺山門の狛犬とよく似てはる獅子像

(第4巻) 604-2/2 朝日新聞、平成18年12月11付(971)

1315^p-1/4 11行へ 1,315^p-6/7

国^{ふた}所^{しよ}めぐりし首藤^{すどうはら}一^{いち}創元社、一四頁参

照^あえて言えは、

へ北魏^{ほくぎ}時代の洛陽^{らくよう}城内^{けい}に栄^{さか}えた永寧寺^{えいねいじ}の南門^{なんもん}・東門^{とうもん}・西門^{さいもん}の通路^{つうろ}は、みな三^{さん}ア一^{いち}千^{せん}状^{じょう}

をなしていて、
外向^{がいむ}きの力士^{りきし}と内向^{ないむ}きの獅子^{しし}が据^すえ置^お

かかれていたのではなからうか

と想像^{さくさう}される。(第241回へ三ア一^{せん}千^{せん}参^{さん}

照^あ

さて前^{ぜん}述^{じゆつ}のとおり、洛陽伽藍記^{らくようがらんき}の第一卷

城内^{けい}へ永寧寺^{えいねいじ}条^{じょう}に、南門^{なんもん}は、三層^{さんそう}の楼門^{ろうもん}とて

三本の階段通路^{かいだんつうろ}を備^{そな}えており、高^{たか}さは地^ち

上^{じやう}二十丈^{じゆうちやう}。その作りは、今の北魏^{ほくぎ}時代の

日端門^{たんもん}と宮城^{きやうじやう}の南^{なん}正面^{しやうめん}の門^{もん}と似^にて

いたし

と述べられていて、主目^{しゅもく}される。

高州府志

宮城十三門中の北面（西側）の「大夏門」に「穀水」を注ぐ。また東に向かい、大夏門の下を流す。また「後漢代」の「夏門」である。陸が弟に与えた書に、「門に三層があり、高さ百尺。魏の明帝が造ったものである」といふ。とある。また「洛陽伽藍記」に「序」には、「大夏門」について、こう記されている。『北魏の宣武帝は、魏の明帝にならって、大夏門を三層の門楼とし、地上二十丈の高さとした。洛陽の城門の楼はみな二層で、地上百尺（十丈）であつたが、この大夏門だけは雲にも届かんばかりの費（瓦ぶきの屋根のあゆ）であつた。』とある。（第十八章「宮城」の項において既に述べてある。）北魏時代の宮城門は、大夏門を除いて、皆二層の楼門であつたことが解る。

層の端門(宮城の南正面の門)というは、北魏時代の宮城十三門中の正門ではない。二層の宮陽門。

また、北魏時代の南宮の正門(閼闔宮門)の内奥の門、および北宮の正門の内側に建てられた門に、三本の階段通路を設ける必要性は無さそう。 (巻頭の第11図北魏の洛陽区面想像図中の閼闔宮門参照)

とすれば、ここにいう端門は、南宮・北宮の正門か、あるいは外郭城南端の正門のこ

し、か、南宮の正門(閼闔宮門)は、中門であり、北宮の正門も中門であって、外郭城南端の正門が端門であつたろうと想像される。

この話を進めてきた。

最外外郭城の正門、端門は、洛水にその秀麗な姿を映す三層の樓門であつたろう。

思われる。

元 2356

東の三門
④ 1315^{P-2/3} の右更から
郭門 ④ 1335^P
④ 1336^{P-4/5}

④ 1315^{P-1/3} (1099) 3/4 (3行へ)
1.316^{P-2/2}

④ 1315^{P-1/3}

階段状になった通路がある。その日端門の楼門には、三本の
階段通路を登り、そして下って、往き来
したのである。と推察される。
なお、最外外郭城の南正面の正門、日端門の
の起源は、――何と呼ばれていたのかは
分らないが、周初の周公旦のころにまでも溯
るであろう、と考えてみたい。

＊

さらにまた、あえて述べると、
永寧寺の周りの塙の東西南北に、それぞれ
小門が一つづつ設けられていた。東と西の二
門は、南門と（ほぼ）同様だが、楼閣が二層造
りであった。
という記事とから推して、
洛陽の最外外郭城の東西南北に、それぞれ
門が一つづつ設けられていた。
東と西の郭門は、日二層の楼門で、日三
本の階段通路を備えていた。

（＊）
と
思
わ
れ
る。
第9、10図参照

左行 大内裏の図 1342^P
内裏の図 1352^P

日本書紀(下) 566^P下

天つき
改行
1100^P
紀下 566^P下

1,317^P-1/5

の場合

1行 1行

日本の都城

一方、我国の平城京などの都においても、

内裏南面の正門のほか、に四門(合計五門)

の南面する正門が設けられたようである。

一番外側の門が口羅城門(口羅城門)

外から二番目の門が口朱雀門(口朱雀門)

外から三番目の門が口宮門(口宮門)

外から四番目の門が口大極殿門(口大極殿門)

最奥の五番目の門が口内裏南面の正門(口内裏南面の正門)

である(巻頭の第14回)日本書紀(下) 岩波書

店、五六六頁「よみがえる平城京」坪井清足監修

日本放送出版協会、八六頁(他参照)

つまり、周公旦が築いた洛邑・成周(洛陽)

の五門のうち、外側から三番目の門は口中門

と呼ばれ、同じく、平城京などの都の

外側から三番目の門も口中門と

呼ばれた、ということであろう。

そして、洛陽の都の口中門も、平城

京の都の口中門も、共に、宮城門の内なる

口中門宮門のことを指しているのである

、と思われ。

第14回 小笠原公朝 100頁
609^P

平城京の正門が
86頁(下)

平城京内の正門が
不明 11行

日本史
1018P

47 1972
10年 1935
37 37
改正

1.317-2/5

1308
23 1317
114

すなわち、洛陽の都において、日本の都
にありても、共に
へ日へ王宮門は、五つの南面する正門
のうちの真中の正門という意味で、口中門と呼
ばれたであろう
と推察される。(第1図参照)
平城宮(前面)朱雀大路の西側は、建物など
広場だったようだ。↑↑「朝日新聞」平成二十七
年十二月十六日へ平城宮跡へ朱雀門前広場だ
た? 第6・9・13・20・249(図参照)
羅城門は、平城・平安二京外郭の南面中央
の楼門のことである。
羅城とは城の外郭の意味であり、羅城門は
日らしいせいもんとも呼ばれた。
□平城京の羅生門跡は大和郡山形市来生へら
ようの佐保川河川敷にある。昭和十年佐
保川来生橋改修の際に、羅生門礎石四個が発見さ
れ、昭和四十七年の発掘調査で、明基壇を確定し
たが、遺構の残りが悪く、規模の確定には
たらなかった。状態

ヨゴレとHV

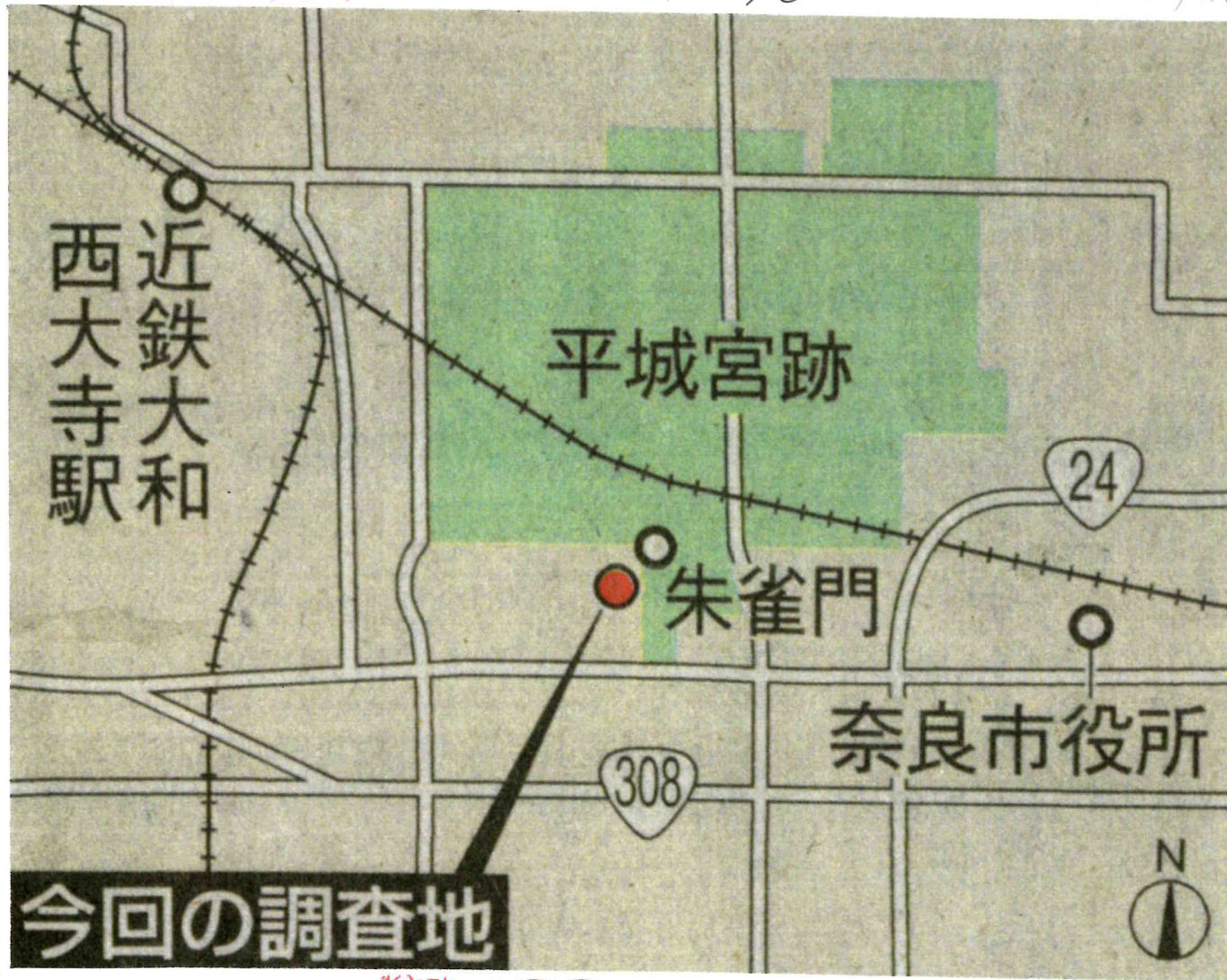
1,317² 3/5

* 1,317² - 3/5 の続きとして掲載したい。

- ・カラー
のちと(1/4)に
- ・右頁の右上(1/4)に
大きく掲載して
下さい。

- ・うすきたないグレーを
明るいグレー、
もしくは白に
変えて下さい。

- ・うすい緑色も、
明るい色に
変更して下さい。
ヨゴレとHV



中心のりわけ
1309

中心のりわけ
1409

第249回 平城宮、朱雀門前は、広場だった？

『朝日新聞』平成27年12月16日付「朱雀門前、広場だった？「建物跡確認できず」」参照

朱雀門の南側、朱雀大路の西側に隣接する2区画(2坪、計1980㎡)を発掘、建物跡の確認が出来なかった。宮城の外周に、広場がめぐらされていたのであろう。

1317-4/5
 平昌内基壇
 百科 31-294
 29-384
 日本史辞典 1018
 百科 31-295

② 平安京の羅城門跡は東寺西大門の西方約四
 の〇の字の字来生（らいせい）にあり、重層の
 七層五戸の門と考えられている。
 ・よりてより詳しく、次のように説示されて
 往古の平安京の中軸線朱雀大路には現在の千本通りである。
 平安京の羅城門は、左京・右京をわかつ朱
 雀大路の南端（九条）にあつて、はるかに北
 のかた宮城の朱雀門に相對して立ち、洛中第
 一の大門といわれた。二重階で朱塗、正面は
 九間、戸七間、その前後にそれぞれ五級の石
 段があり、瓦葺で屋上に鶏尾を置き、羅城
 門と書いた額が掲げてあつた。楼上に最澄
 の作といわれる八臂（腕）の毘沙門天を安置
 し、王城の鎮護にしたと伝えられる。
 とらう。〔日本史辞典〕東京創元社 へ羅
 城門。〔世界大百科事典〕平凡社 へ平安
 京 へ羅生門 へ広辞苑 へ羅生門 へ参照
 〔たぶん〕城
 ① 洛陽最外郭南端の曰端門は、三層の楼
 門で、三本の階段通路を備えていた。

三本の階段通路
 1315
 11年42

1568
 2021
 999
 2333
 モン

令和元(2019)12.29(日)〜

たぶん 前頁 185行
1188¹/₂ 城南御道
2行 (こ)

1,317¹/₂ 5/5

解さる 1317¹/₂ 165行
前頁 105行

下 12/30
12/30

うであり、
② 平安京南端の「羅城門」は、「二重閣」
で、「五級の石段」が南北「水」に設けら
れていった。
前後(北側および南側)
のであろう。
細部はともかく、基本的には、洛陽の「端
門」も平安京の「羅城門」も、同様の構成
であったようである。
あるように思われる。
■ なお
(1) 洛陽の「端門」のすぐ南には、洛水にかけ
渡された「浮橋」があったと考えられる。
洛陽都城内の城南御道を駆け上ってきた貴人の
乗る馬車は、「端門」(階段通路が付設さ
れた三層の楼門)や「浮橋」を通らず、どの
ようにして洛水の南へ行くことが出来たのだ
ろうか、と興味深く思われる。
(2) 同様に、平安京の場合も、馬車が「羅城門」
(五級の石段を備えた重層の門)を通り抜け
ることは出来なかっただろう、と思われる。
南側にも